

Epiphanies その瞬間

No.7

出会いを成長の糧に



保全生態学研究室

吉田 薫 教授

Kaoru T. Yoshida

助手に採用されて数年後、まだ30代でした。現在は北海道大学の教授をなさっている内藤哲先生と大学の構内で偶然お会いしました。実は、内藤先生とは駒場時代に同じクラスで学んだ間柄。内藤先生はアメリカで最先端の植物の分子生物学を学んで帰国し、遺伝子実験施設の助手として働き始められたばかりでした。一方、私は研究に行き詰まりを感じていた時期で、自分の研究をさらに発展させるためには分子生物学的手法を学ぶ必要があると考えていました。渡りに船というわけではありませんが、同級生の気安さもあって相談を持ち掛けると、内藤先生は「じゃあ、ぼくのところに来ればいいよ」と、私が遺伝子実験施設で学ぶことを快諾してくれました。

それから約半年間は、本郷の遺伝子実験施設と弥生の研究室を行ったり来たり。ちょうど子どもを保育園に預けている時期でもあり、食事を摂る時間も惜しんで実験に明け暮れたものです。

内藤先生から学んだのは先端的な実験手法だ

けではありません。研究にとって緻密な計画と正確な実験がいかに重要であるかを学びました。実験の各段階で厳密な検証を行い、それを積み重ねることで実験結果が真に正しいか否かも分かるのだということをも身をもって知りました。その後、独自の遺伝子単離技術を開発し、有用遺伝子の単離を進めることができたのも、ひいては今日の私の研究があるのも、この遺伝子実験施設で必死になって学んだ半年間があるからだと言っても過言ではありません。

思えば、私が研究者の道を歩むきっかけを与えてくれたのは中学校の理科の先生でした。どんな小さな疑問にも真剣に答えてくれた先生のおかげで、実験すること、研究することの楽しさに目覚めました。あの頃の気持ちは今も変わりません。仮説を設定し、実験によりその仮説を立証していく——その醍醐味や達成感が研究の支えとなっています。もちろん、すべてが思い通りに行くはずはなく、失敗は数えきれないほどあります。しかし、失敗から学び、失敗を成長の糧としながら前に進むのが研究なのだと思います。



左から内藤哲先生、門脇浩一先生（農研機構）、私、山田恭司先生（元富山大学教授）。オランダ・アムステルダムにて（1996）